自由人の舌打ち

vol.50

不幸な時代をどう引き受けるか？

文 島田 雅彦
text by Masahiko Shimada

まださほど長くは生きていない四十代以下の世代にとって、九〇年代、さらにはゼロ年代がノスタルジーの対象になっている。どの世代にとっても、自分の物心がついた頃、青春を過ごした時代への郷愁は捨てがたい。

一九六〇年代生まれの私にとっては七〇年代がそれに当たる。どの国のどの時代に青春時代を送っていたかという問題は親ガチャみたいなもので、自分で選べないのだが、いずれはその時代を我が身に引き受けるしかない。

六〇年代生まれは日本では、自分の成長の過程と経済成長の軌跡がほぼ一致している世代で、繁栄を謳歌した記憶があるのだが、韓国では最も不幸な世代と見做されている。学生時代は民主化運動の担い手になり、軍事政権から弾圧を受け、結婚し、子供ができ、マイホームを手に入れようとした時には経済危機に見舞われたからだ。日本では私たちの下のロスジェネ世代が、経済停滞期の就職難、格差拡大の煽りを喰った不幸な世代である。ただ、不幸の比較ということでは、最も戦死者が多かった一九二〇年代生まれよりは、戦争がなかっただけましと思わなければならないだろう。

ある時、友人に誘われ、高円寺の商店街で催された路上飲みに参加した。主催者は現在四十代のロスジェネ世代で、無職の人や家出人たちが自然に集まってくるのだが、今では国際的広がりがあり、北京語や英語が飛び交っていた。現代中国の熾烈な競争社会からは距離を置いて、最低限の労働しかしないという「寝そべり族」の若者も来ていた。上昇志向を持ったとしても、一生報われないことに気づいてしまった彼らは中国のロスジェネ世代といってもいい。二十代の中国人の女子のこんな呟きが印象に残っている。

私達は一生働きたくないと思っているんですけど、東京に来ると四十代でもそういう人がいて本当に励まされます。

「働かざる者食うべからず」という原則は所詮、労働者搾取の方便でしかないことは明白なので、今後は働かずに食ってゆく実践を通じて、静かに富の再分配と社会変革を促す生き方もありかと思うし、それが不幸な時代の引き受け方になる。

Profile
1961 年東京生まれ。1984 年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の 1983 年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授